

経営倫理士の目線で古典を読んでみた♪

～古典から学ぶ経営価値四原理システム～

経営倫理士コンソーシアム

代表幹事

北村和敏

第3回目投稿（2025年11月10日）

〈アランの『幸福論』〉



今回は、アランの『幸福論』についてのレポートです。人間の究極の目的である「幸福」に关心がない人間はいませんよね。しかし、現実には幸福になる人もいれば、そうでない人もいます。この違いはほんのちょっとした思考の違いにあるようです。

アランが生きた時代背景は大激動の時代です。第2次産業革命が起き、列強諸国が途上国を支配する帝国主義の時代になります。そして第一次世界大戦（1914～1918）へと進みます。この時代を生きた人たちは、避けられない運命を強烈に感じたことでしょうね。自分の意思ではどうすることもできない巨大な力が働いています。そんな環境下で、アランは幸福になる法則を見つけます。そして名言「悲観主義は気分のもの、楽観主義は意志のもの」と言い放ち、1925年に『幸福論』を刊行します。

ちょうどこのころの日本も得体の知れない暗い雰囲気に包まれます。芥川龍之介は遺書に「ぼんやりとした不安」という言葉を書き残し、自殺します。明るい未来が想像できなかったようです。運命が強過ぎて個人の意志では太刀打ちできない悲観主義が蔓延していのでしょう。

世界中が悲観的になりつつあった時期だけに『幸福論』はある意味、全世界の癒しになったのではないでしょうか。アランの『幸福論』は、運命に翻弄される中でも自分の意志で行動するときに幸福が付いてくるというものです。「幸せだから笑うのではなく、笑うから幸せになる」これまた名言ですね。人間は暗い環境下では、あれこれと悲観的なことを

想像してしまいます。考え込まないで、まずは行動すること、健康な生活や礼儀作法など物理的な行動によって幸せになるとアランは明快に説いてくれています。

これは子どもを見ていると納得しますよね。子どもは今を楽しくしたいので動き回ります。そうなのです。まずは行動することで幸せを求めています。しかし、大人になると行動しないで悩み続けるだけの存在になり、ますます不幸になっていきます。なんなのでしょうか。経験が邪魔をしているのでしょうか。それとも効率を求めてあれこれ考えてしまうのでしょうか。子どもから大人になる過程で、親や先生から「〇〇ちゃん、ちゃんと考えてから行動しない」という教育のせいでしょうか。社会人になってからも上司から「〇〇君、考えてから行動に移さないと効率が悪いよ」と言われますよね。そうなのです。学校も会社も常に効率性や生産性を重視した社会システムが出来上がっています。このシステムは学校での成績を向上させ、会社の業績もアップさせます。現代人にとって考えることは正義なのです。深く考え続ければ、きっと幸福への近道があるはずだと思っているのでしょうね。アランに言わせれば、これはナンセンス。トライ＆エラーが幸福への近道だと言うでしょうね。

アランの『幸福論』は幸福になるためには、とにかく、まずは行動する「はじめの一歩」の大切さが伝わってきます。童心に帰ったように、まずは体を動かしてみると幸せな気分になれますよ（笑）。「ロダンの”考える人”のラジオ体操」などを想像するだけでもウキウキしませんか（汗）。思わず上野の西洋美術館の入り口でロダンの像に向かって言いたくなりますよね。「考え過ぎると不幸になるよ」（笑）と。

「行動する」というキーワードで思い浮かぶのが、すばり「二宮金次郎像」です。最近はまた小学校に復活しているようですが、本を読みながら歩く姿は交通事故の原因になるからということで、最近は突っ立っている金次郎像に変身しています。しかしこれは残念です。二宮金次郎が伝えたかったのは、本を読みながら歩く姿、そう、「行動」しているところが最大のポイントなのです。本来の二宮金次郎像もアランの言う「行動」の大切さを言わんとしているものなのです。突っ立った金次郎像では、日本はますます不幸の増産が止まりませんよ。要注意です（厳）。

さて、今回のアランの『幸福論』で注目したのが「情念」です。情念の定義は「心に起る理性的には片付けられない何か」ですよね。理性も思考も情念の中に包含されています。包含されているからには理性では解決できません。となると、この情念は精神の世界では解決できないモンスターなのです。自分を不幸だと思っている人は、このモンスターが働き、不幸を想像してしまうのでしょうか。そして自分から行動を起こすのではなく、誰かが何かをしてくれるのを待つように脳に指令がいくのかも知れませんね。そして最後

は不幸から逃れられなくなっています。

この状態は、がんを告知された患者にも見受けられます。医者から余命何年ですよと言われたら、お先真っ暗ですよね。やる気も出なくなり、余命よりも早くなくなってしまう患者さんも多いようです。少し前の話ですが、順天堂大学ではこれに対応すべく、病理の樋野先生という方が「がん哲学外来」を新設しました。これが大当たりするのです。生きることに失望していたがん患者がみるみる元気になります。積極的にがん治療に参画し、余命をはるかに超える効果がでたのはもちろんのこと社会復帰出来るまで回復した患者もいたそうです。

この樋野先生は新渡戸稻造の信奉者で新渡戸稻造全集がすべて頭の中に入っています。なにをしたかと言うとがん患者に魔法の言葉を掛けるのです。患者のやる気のツボにはまる新渡戸稻造の名言を吹き込むのです。仕事をバリバリこなしていた経営者などは、特にがんの告知をされると落ち込んで生きる希望を失います。そんな経営者に向かって「がん治療への取り組みは、あなたの人生最後の仕事ですよ」と樋野先生は言うのです。仕事しかしてこなかった経営者にとって「仕事」というフレーズだけでやる気を取り戻し、がん治療に積極的になるのです。まるで樋野先生の言葉が、がん患者の情念を崩壊させ、がん治療という「行動」に向かわせたのです。ツボを突いた言葉の力は素晴らしいですね。けっして慰めやいたわりの言葉では情念を打ち破ることは出来ないでしょうね。がん患者を「行動」に向かわせたのは、希望という生きる力が心に芽生えたときだったのです。

樋野先生の口から出てくる言葉は、悲観主義の患者を一瞬にして楽観主義に変えていきます。人間には理性ではコントロールできない情念をコントロールする感性のようなものを感じます。その感性とはなんなのでしょうか。それは人間の持つ共感性とか共鳴力かも知れないですね。

デカルト以降、人類は機械的世界観を身に付け、因果関係から物事を定量化、さらには部分最適化することで科学技術の発展を手に入れました。しかし人類は幸せになれない現実をアランは見たのでしょう。実に皮肉ですよね。デカルトを尊敬したアランが、デカルトによってもたらされた負の影響を解決する処方箋である『幸福論』を世に出したのですから・・まるでアランとデカルトはコインの裏表の関係のようです。(北村)